Title:道へき・複連　130号.ec6 Page:4 Date: 2007/11/20 Tue 17:29:46

第１分科会
夕張市立夕張小学校

１．研究主題

「一人ひとりが自らすすんで考える子どもの育成」
～算数科の間接指導を通して～

２．研究内容

研究仮説を３点立てた。

仮説１「系統性・発展性を踏まえた指導計画」。子どもの発達段階等を大切にした系統的な指導計画を工夫することで、子どもたちは着実に考える力を身に付けることができると考えた。

仮説２「個に応じた適切な指導・支援」。一人ひとりの学習状況を把握し、個に応じた指導・支援を工夫することで、子どもたち自身が課題を解決していく力を身に付けることができると考えた。

仮説３「授業の改善」。課題の設定や間接指導などを工夫することで、子どもたちは他の人の考えや意見を聞いて、自分の考えを深めていく力を身に付けることができると考えた。

特に１について、算数科において考える力を「５つの力」（①やろうとする力、②問題を見つける力、③話し合う力、④考えを組み立てる力、⑤表現する力）とし、発達段階に応じてねらいを定め、考える力の育成に当たった。また、間接指導の方法についても検証を重ね、それぞれの指導方法の長所と短所を明らかにした。

３．公開授業

公開授業①　２年生算数科（単式学級）

かけ算の導入のため体験的活動を重視し身近な環境からかけ算を探す活動を行った。興味を持って教室内を探索し、様々なかけ算を発見することができた。

公開授業②　３・４年生算数科（複式学級）

３年生は３桁×１桁のかけ算。身近な題材として夕張メロンを取り上げ、既習事項から解決方法を探る授業を行った。普段、教師発案の「わからんちん君」という子を登場させているが、今回は３人とも「その子がわかる解法」を考えていたため若干ねらいとずれた面があったが、しっかりと理解できていた。

４年生は三角形の弁別学習。辺に着目して正三角形と二等辺三角形を見分け、三角形の弁別について学習した。すぐに二等辺三角形と正三角形の弁別をできていた児童もいたが、角にこだわる児童もいたため、弁別に苦労する児童に加え、そちらの支援も重点的に行った。

公開授業③　５・６生年算数科（複式学級）

５年生は三角形の求積。２つの図形を比較するところから求積に対して自然な興味を持たせ、求積方法を探らせた。実際に図形を手元に用意して考えさせたため、すぐに平行四辺形を作って解くことができた。

６年生は分数同士のわり算。その解法について図や式などを用いて話し合った。事前に児童がどのように対応するか検討した。面積図や数直線、比を使った求め方などを想定していたが、おおよそ予想の範囲内で解決を図ろうとしていた。

４．研究協議

全体として、本研究を高く評価する声が多かった。児童が個々に持つ小型のホワイトボードは考えを相手に伝える良い手段という発言があった。個への配慮が十分に感じられた場面があった点や、５・６年生では「５つの力」が身についていたと思われるので、今後、より進めて子どもたちが自分たちの力でまとめをするような授業を展開できるようになると良いという点についても指摘があった。

また、へき地複式教育は教育の個別化には好条件だが、練り合う場面の集団化は難しく、本研究のサブテーマは複式における大きな課題であるという意見が出された。

第２分科会
夕張市立幌南小学校

１．研究主題

「自ら課題を追求し、心豊かに表現できる子どもを求めて」～国語科における複式学習のあり方～とし、実践的研究に取り組んだ。

２．研究内容

研究の仮説を「子ども一人一人の興味・関心に沿った課題をもち、追求することにより、主体的に学習する子どもを育成することができる。」、「子ども一人一人が表現する場面、受け取る場面を設定し、そのなかで思いを伝え合う楽しさを知ることによって、豊かな表現力を育てることができる。」、「自らの考えや思いを対話、交流することにより、伝えあう楽しさを知り、間接指導時に主体的に学習に取り組むことができる。」とし、３つの研究の視点を設定し研究